

諸商品集成の感性的直観（その二）

——併せて遊部、宇野、向坂の諸氏の所説について——

梯 明 秀

- I、疎外的実存としての物—— II、第三卷における外面的直接性——（以上前号）——
III、端緒的商品と終極的商品——（本号）—— IV、ヘーゲル「有論」の直接性——
（以下後号）—— V、カントの先験的感性論の適用—— VI、経験的構想力の破綻。

III 端緒的商品と終極的商品

すべて学問は、それが如何なる種類の科学であるにせよ哲学であるにせよ、常識の否定として成立している。日常のわれわれの意識に成立している知識としての常識は、われわれの社会生活を社会的環境に順応せしめるために、その日その日に、その場その場で獲得して保持してゆくところの、また不必要に忘れて忘却してゆくところの諸知識の集積であるにすぎず、それが現実の社会生活で獲得されてゆくにあたって、同一集団あるいは同一時代に共通な感覚でもって、環境的諸現象を受容し綜合するかぎりでは、コンモンセンスであり、また、自己の属する社会集団を或る期間だけでも存続せしめるに必要な分別を、諸現象について働かさかざりて、健全な悟性とも呼ばれている。しかし常識としての環境的諸現象にたいする判断力は、環境的社会的変動に自分たちの生活

を順応せしめるだけのものとしてプラグマチズムの域を出ることは不可能である。この域を超えて何らかの一つの原理で、その場その場の諸判断を統一し、この統一作用を徹底せしめようとするとときに、哲学あるいは科学としての学問的意識が初まるであろう。この学問的意識に成立する知識は、したがって一つの原理によって組織され体系化されていなければならない。このいみで、学問的知識は常識の否定でなければならないが、しかし学問といえども、現実のわれわれの日常の意識を離れて存在しえないものであるかぎり、それは、常識に初まるだけでなく、常識を自らの成立の地盤として認めるべきであるかぎり、言いかえれば、学問とは、常識をエレメントとしながら自らのこのエレメントの否定において成り立つものであり、あるいは、常識の内において常識を超えたものであるとも、言うことができる。資本論も学問であるかぎり、このような常識との関係をまぬがれていない、どころか、この関係をかえって典型的に保持している知識体系であるのである。というのは、資本論の学問としての体系は、単に「抽象的なものから具体的なものへ上向する」という叙述の体系だけをいみすべきてなく、資本制社会の具体的な諸形態、諸現象から出発して、その背後に隠蔽された本質的諸関係を抽象するという研究過程を前提してのみ、抽象的な本質から具体的現象へという復帰の過程も可能であるとすべきであるからである。これは、マルクス自身も言っているところである。

——「古典経済学が関心をもつのは、種々の形態を發生的に展開することではなくて、これらの諸形態を分析によって統一に還元することである。なぜなら、それはこれらの諸形態を与えられた前提として出発するからである。とはいえ、分析は、發生的叙述の不可欠の前提であり、現実の發展過程をその様々の各段階において理解するための不可欠の前提である。」——

ここに分析とは、われわれの意識への直接的所与としての具体的諸形態から、その背後に隠蔽されている本質的關係を抽象するための科学的方法である。そして、研究対象の外面的直接性から出発して抽象的原理に到達する方法としては、遍歴する下向の旅である。すなわちマルクスは、「研究は、材料を詳細に占有し、その種々なる發展形態を分析し、これらの諸形態の内的関連を追求しなければならぬ。この仕事が完了してのち、始めて現実の運動は適当に叙述されるのである。」として、現実的対象の實在的運動を頭脳に反映せしめるための抽象的原理からの具体的諸形態への総合的演繹が、この逆の帰納的分析を前提としてのみ可能である、としていることは明白であるが、しかし、単に可能であるというだけでなく、資本論の学問的体系としての意味も、ここに始めて生じてきているとせねばならない。この二つの方法は、一方が他方を前提する關係でなく、相互に前提しあっていて一つに統一されているからである。すなわち下向する帰納的分析が上向する総合的演繹の単なる前提的条件というだけでなく自ら前提であると同時に後者を自己自身の目的としているのであり、逆に、上向の旅も単に自己目的々であるにとどまらず下向の途を前提したかぎりの自己目的性として、後者のための前提的条件の意味を内在せしめている。かくて下向は上向のためであり、上向は下向のためであり、下向の到着点は上向の出発点であり、上向の到着点は下向の出発点であるものとして、下向と上向とは方向を背馳しながら一線に連絡する、すなわち円環運動を形成する。ヘーゲルは、純粹思惟の前進がその復歸的後退と同一性にあるということによる思惟自身の円環的自己運動に、かれの哲学の体系性を主張しているのであるが、マルクスがかれの学問的思惟の円環運動を、かくのごとく下向と上向との統一としてヘーゲルから継承しているかぎりにおいて、かれの資本論を体系的ならしめることができたと考えうるであろう。ただヘーゲルにあっては、弁証法的自己運動をする主体

が絶対精神であつたにたいして、マルクスは感性的に実在する現実的世界を自己運動の主体としており、そのかぎりて実在世界の現実的自己運動の發展過程を、それに対立するわれわれ感性的人間の頭脳のうちに反映せしめるさいの現実的思惟の必然性として、かかる円環運動を主張したのであつた。下向としての分析的帰納と、上向としての演繹的綜合との同一性の思想は、『経済学批判』『序説』において「経済学の方法」として既に展開されてゐるわけであるが、この一般的な方法論は、現実には資本論において特殊化されて資本論の体系化を成就せしめたと思なければならぬ。そのかぎりて、資本論の体系性を、その叙述方法の体系性にのみ認めることは、一面的であるというよりも、体系性の本来の意味を理解せざるものというほかはない。なるほど、資本論の体系的叙述のほかには資本論はない。しかし、この資本論としての体系的叙述の上向の途は、下向の旅としての研究過程を前提していたのであり、この下向と上向との二つの途が円環として連絡するところに、資本論を書いたマルクスの思惟の必然性があつたのではないか。

勿論マルクスにおいても、ヘーゲルにおけると同じく、叙述の進行は「根拠すなわち根源的にして真なるものへの復帰であつて、出発点となるところのものは、むしろこの根拠に依存し、実際はこれによつて産出されるものにほかならぬということ」であり、このいみにおいて前進 *etrisus* 〓 後退 *regressus* であることの事実を、体系性ということの本質として考察してははずである。だが、しかし資本論は、ヘーゲルの方法論を『論理学』のみから批判的に継承したのではなくて、資本論が哲学であると同時に経済学であつたかぎりて、『精神現象学』をも批判的に継承せねばならなかつた。『精神現象学』が、われわれの経験的感性的意識から出発して、『論理学』の成立するエレメントとしての純粹知識にまで到達するという過程は、マルクスにおける見えざる研究過程

に、すなわち資本論叙述の成立するエレメントとしての単純商品にまで分析的に下向する研究過程に、対応するものである。そして、また『精神現象学』の、その展開過程を見えざる手で導いている『論理学』との『精神現象学』自体における関連は、資本論における上向的叙述と下向的研究の両過程の関連に対応していると思われることができる。この比較からして、マルクスは資本論においてヘーゲルの二つの学的体系を弁証法的に統一しているという推定が論証されるならば、資本論を成立せしめたマルクスの思惟の必然性の描く円環運動は、賃労働者の日常の体験を総合的に具体化しつつ基礎づけてゆく過程としての前進的叙述が、同時に、この基礎づけの原理としての世界観を賃労働者が、その日常生活において自覚するにいたるという出発点への復帰の過程をいみするわけである。この自覚の過程は、上向的叙述と離れてあるのでなく二つの過程が同一のものであるかぎり、それは叙述の背景に隠されている論理であるわけではない。ところで読者にとってならば、この自覚の過程は、論理的に叙述の進行につれて実現してゆくわけであるが、現実の実践生活においては、一つの世界観をもって環境的対象のうち、暗中模索の苦難の途を拓き続けて始めて到達しうる境地である。これが研究過程であるかぎり、叙述の背景的論理が自らの外に現存化したものが研究過程であるといえる⁴⁾。かくて、自己の世界観の実現としての研究過程の到着点は、この主観的世界観の客観化として叙述の出発点となり、ここに描かれる現実的な円環が、現実的人間の現実的思惟の必然性であると言へるわけである。これが資本論における現実的な体系性であって、叙述の体系性は、その外化した一面性にすぎない。

1、マルクス『剰余価値学説史』第三卷、邦訳（改造社版「マルクス・エンゲルス全集」第十一卷）五六三頁。

2、マルクス『資本論』第一卷、「第二版への跋」（長谷部訳、日評版一、一三四—三五頁）。

3、拙稿、「資本論の学的体系性」本誌第一卷第六号所載。

4、拙著、『資本論の学問的構造』第一論文第五節。

このように、資本論の学的体系性を、その体系的叙述と科学的研究との総合的全体のうち認むるばあいの円環的運動は、科学的研究の到着点が体系的叙述の出発点であるといふことの、マルクス自身の前に引用した言葉によつて、一方の連結の実証を既に成就してきたわけであるが、他方の連結としての体系的叙述の到着点が研究的分析の出発点であるといふことの実証をまづ、一つの円環的な図式として描きうるわけである。ところで、このことの実証は本章の第一節において成就したところであつた。すなわち、第三卷の最後の叙述に展開された社会的総資本の現実的外面性こそは、われわれの日常の常識に直接的に与えられる経験内容であり、この常識としての感性的直観内容の自己止揚的な分析的思维に、科学的研究は導かれるべきであるからである。かくて、資本論の体系性を成立せしめているマルクスの学問的意識は、常識から出発して常識に復帰する円環運動である。資本論こそは、常識のうちにあつて常識を超えた学的体系の典型である、と先に言つてきたのは、詳しくは、このことであるが、自らのエレメントとしての常識を否定しながら肯定しているところに、資本論の学問としての生命の時局的に常に新たなる所以があるのである。常識を地盤として成立するものとして常識を肯定するのであるが、常識を肯定しながら常識の波動に溺れない所以は、その学問的意識に思维の必然性を堅持するところの、主体性が確立されており、しかも、この主体性の内容こそが、円環的自己運動の完遂であるからである。

ところで、資本論の学的体系性の根柢としての上向即下向の円環運動を、右に述べてきたごとく図式的に理解することは、いまだ抽象的であるをまぬがれない。ヘーゲルにおいて円環的という譬喩は、幾何学の円周のもつ

論理構造からの類推である。円周上の如何なる点も円周を構成するエレメントとして、円周の微分的部分であつて同時に積分的全体である。下向即上向という思推の円環運動にあつても、その進行の如何なる時点、段階においても常に、円環運動の全体が表現されていなければならぬ。これが下向と上向との、あるいはヘーゲルにおける前進と後退との同一性ということの真実の論理的意味でなければならぬ。とすれば、上向的叙述の如何なる段階においても、下向的分析を内在的に前提していなければならぬし、さらに、下向的研究の暗中模索の一步が上向的論理の見えざる手によって導かれているとせねばならない。そして、如何なる部分も常に唯一の全体を表現しているかぎりて、部分は相互に正当な地位に位置づけあい相互に必然的に関連して全体を一つの体系となすことができるわけである。このことは、資本論において現実に体系性を展開しているその叙述過程において容易に実証しうるところであらう。各節は相互に必然的に関連し正当なる位置を占めて不動でありながら、全叙述の各段階は常に論理的進展の全体を意味し、あるいは表現している。したがって、その上向的叙述の如何なる段階においても下向的分析を内在せしめているということこそは、資本論の体系性が上向即下向の円環にもとづくという内容的意味においても、また、体系性ということが一般に如何なる部分と全体との同一性であるべきだという形式的意味においても、資本論が体系的学問で徹頭徹尾なければならないということの根拠でもあり、この根拠の実存化した結果的な現象でもある。かくて、その体系的叙述の総合的演繹の進展が帰納的分析によつて中断され、あるいは補足されているかのごとき外観は、この叙述自体の体系性さえも壊すものではないのであつて、上向的叙述に潜在する下向運動が体系的必然性によつて顕現したものとして、かえつて、全叙述のかかる部分において、資本論の総合的な真実の体系性が実存的に証示されたものと、理解せねばならないのである。こ

のこの最も鮮やかな例証は、第一巻第一章の第一、第二の両節であろう。演繹的綜合としての上向的叙述の出発点において、この両節は下向的に帰納的分析を展開しているのである。このような外形において際だっているだけでなく、下向の到着点として価値実体が第三節のみならず全三卷の上向的演繹の出発点であるという点で、實質的に資本論の真実の体系性を証示して極めて鮮やかであるとせねばならない。これは、資本論の学的体系性において、第三卷の末尾にあつて社会的総資本の現実的外面性が、現実的人間の感性的直観の所与として、到着点が出発点と同一であることの証示と、照合して見れば、その体系的意味の偶然的でないことを読者は理解するであろう。すなわち、第一巻における第一、第二の両節から第三節への方向の轉換は、常識から出發して常識に復歸する資本論の体系の、下向即上向としての綜合的全運動そのもの方向轉換の場所である。常識の視界を超えた場所での学的操作が、しかも最も大切な操作が、第一巻第一章の最初において遂行されているのである。常識は、かかる学問的旅路の門出を送り歸來を喜ぶだけで、苦難の旅路そのものを直接的に見ることはできない。

5、この点、わたしは「現実的な学としての資本論」(『資本論の学問的構造』所収)において、それが外的反省の立場であることを強調しておいた。しかし、この点にたいするマルクス理論界の反響が否定的であつたことに、わたしは意外の感をもつた。下向ということが一般に科学者のとるべき帰納的分析を意味するかぎり、そして、第一、二節の方法がまさにこれであるかぎり、至極普通のことを指摘したにすぎなかつたのである。しかし、これには、まず、わたしがヘーゲルの外的反省という言葉を使用したことにはたいする敬遠と無理解があつたかに推定されるのは、僭目であろうか。外的反省ということが、一般に科学者の凡てのばあいにとるべき分析方法のことであり、対象を眼の前において外から規定を加えてゆくという反省的思惟方法のことで、これは人間悟性の本質的機能であること、これらのことは、右の論文で説述してあつたはずである。第一、二節が科学的な分析方法であることを認めておきながら、それが外的反省であることを承認できないというよう

な態度は、わたしには奇妙なこととして放置するほかに術はない。さらに第一、第二両節の方法が外的反省であることの承認に徹底できないことは、第三節が商品自体の主體的な内的反省の立場であることにたいする理解も、不可能になるか曖昧になるかのほかないわけで、延いては資本論の体系を論理的に把握することを不可能にするか偏ったものにするかの要石となるものであるが、この点へまでの反省は読者の実力に期待するほかない次第である。第二に、わたしの主張の受け容れ難い事情は、マルクス学界において未だに清算されない公式主義に帰因すると、わたしは推定するが、これも僻目であろうか。たとえば、「抽象的なものから具体的なものへ」という上向的方法論を、マルクス文獻理解の手續きとして、あるいは、實際的資料の整理操作の方法として、使用するにしても、「何故われらの思惟作用は単純なものから始めるのか」の理由を反省することをしないとすれば、この方法論も、自分のものにならないでマルクスからの借り物でしかないであろう。上向ということも、それが意味する論理的内容が、演繹であり、綜合であるとしても、演繹と綜合とが如何に結びついているかの方法論的反省が、前提されていなければ、その人は主體的には上向的に思惟したことを体験しえないのであり、マルクスの公式に啮りついてマルクスらしく考へたものと自己を欺瞞しているにすぎないのである。第一、二節が上向であるとか、停滞しているのであるとか、の所説を耳にして、まことに、これまた奇妙の感に打たれる。上向とか下向とかは譬喩であって、これらの言葉だけで論理の意味をもつものではないはずであろう。こんなことは、言うまでもないことであるが。——ところで、ローゼンベルグが、わたしと同一の意見であることを偶々見いだして(『資本論註解』第三卷、四二頁)心強く感じたので参考のため引用しておく。

——「研究家の第一の任務は、現象の仮象の背後にかくれている本質を探し出すことである。しかる後に研究家は抽象的なものより具体的なものへの上向の方法により、直接的所与として具体的な諸形態に帰らねばならぬ。……マルクスは、この方法を、個々の問題の研究にさいして適用しているばかりではなく、——なかんづく、価値および交換価値の分析のさい、それは特に鮮やかに適用された——全体としての資本制生産様式の研究のさいにも、これを適用しているのである。」——

かくして、第三卷最後の第七篇の外面的直接性において初まるころの、資本論全体系の下向的運動としての

見えざる苦難の研究過程が、その実績を誇らかに証示したものが第一巻の上向的運動を開始せしめている第一、第二の両節の downward 的分析であるとすれば、この両節においてその分析の対象となつてゐるところの端緒的商品は、現実的な社会的総資本の直接的外面性における商品と如何なる関係にあるか。上向的叙述の到着点において、われわれに直接的に現れてゐる終極的商品は、端緒的商品と、対象として異なる物であるか。終極的商品は、われわれの日常の意識において感性的に直観されるところの現実的な商品である。今、此処にわれわれの眼に見え手に触れられてゐる現実的商品である。ところで、第一節の冒頭文節の諸商品、これらの集成が資本家の富を形成する個々の商品は、体系的叙述のあたかも冒頭に位置づけられた物として端緒的商品そのものである。したがつて本来的に端緒とされている点で、言いかえれば、同時に要素的でもある端緒とされている点で、終極的である具体的な商品とは異なるかの外見を与えている。にもかかわらず、「われわれの感性的直観に現れている物」あるいは対象として問題にするかぎりにおいては、この本来的な端緒的商品といえども、それが現実的な商品でなければならぬこと、前節のわたくしの論述の全体がその論証であつたはずのとおりで、ここに改めて説述を繰りかえすまでもない。すなわち、第三巻の終極的商品も、冒頭文節における本来的に端緒的な商品も、ともに、今、此処にわれわれの手に触れ眼に見えてゐる感性的に現実的な商品である。——とすれば、この現実的な感性的直観性としての同一性にもかかわらず、第一節の第二パラグラフ以下および第二節において、価値実体を外的反省の立場から抽象するために、対象として眼前に置かれてゐる個々の商品は、終極的商品と異なる対象であるのであろうか。また、第一、第二節の商品は、冒頭文節の商品とともに同じく端緒的商品でありながら、相互に異なる対象として區別さるべき根拠が何処にあるのであろうか。

このように考えてくれば、第一、第二の両節において、近代の資本主義的商品に非ざる非現実的商品としての、したがって、われわれに感性的に直観できないところの、過去の単純なる商品を、マルクスが対象として定立したとする考え方が、如何にナンセンスであり、かく考えることは、問題自身の実体的根拠から由来するところの必然的な思惟の所産でなくて、ただ現象的な外的関連の偶然的要因を根拠とするだけに満足する安易な思惟作用、——ヘーゲルの斥けたレーゾヌマン——にすぎないことに気付くのは困難でないはずである。

6、第一、第二両節における端緒的商品が資本制以前の単純商品であるべきだという主張の代表者は榊田氏蔵氏である。榊田氏の所説についての批判としては、遊部氏の前掲の「資本論劈頭の商品について」の第四節がある。本節のわたしの叙述だけでは、榊田氏の所説を認識論的な面から衝くことはできるが、全面的な批判としては不十分であろう。したがって適当な場所にゆづって、ここでは触れない。

ところで遊部氏の榊田批判であるが、榊田氏の誤謬を、部分的に正確に、しかし全体としては一面的に指摘したものである。部分的な範疇の意味規定の点は、ここで省略するが、遊部氏が榊田所説を全体として斥ける根拠は、第一、二の両節の端緒の商品を先資本制単純商品とすることは、体系的に不可能であるとするにつきる。しかし、このことよって同時に、歴史的に過去の単純商品が資本制商品の歴史的端緒であったという事実を、資本論において理解することを、遊部氏は抛棄しているのである。したがって、端緒的商品が現在のものか過去のものかの意見の対立は、氏にとっては氏自身の所説によつて克服され解決されたのであり、したがって、かかる対立自体が、「正しい」氏の理論と諸家の「誤れる」理論との対立として、無意味なものになっている。このことは、本章第一節註りでわたしの指摘したところのものであるが、氏においては、氏のヘーゲル理解の不徹底からくるのであり、ヘーゲル論理学の始元論を資本論に外的に適用するという抽象性と一面性からくるのである。もし、たとえ右の対立に意味を認めねばならなくなったとしても、この対立の統一のための遊部氏の方法が無意味になってくるであろう。たとえば、氏は次のようなことを書いている。榊田氏が「商品は単なる商品である

か、資本家的商品であるか何れかである。単なる商品でもなく資本家的商品でもない商品は、事実上あり得ない」と言うにたいして、「何ぞ凶らん。資本論劈頭の商品は、まさに単なる商品でもなく資本家的商品でもない商品、換言すれば、単なる商品であって、しかも資本家的商品でもある商品が問題なのである」と批判して、韓田氏には始原の弁証法などは全く意識されないとする。これは全くのヘーゲルの觀念論であって、觀念的な具体的一般者としての商品を資本論の端緒に定立することであり、氏自身の主張とも矛盾するものである。か或は、かりそめの無意味な過失でもあろう。ヘーゲル論理学始元の弁証法の氏によるヘーゲルから資本論への適用は、「商品としての資本と資本としての資本との相互依存」の形しかとらないのであるが、直接性と媒介性との統一としての端緒的商品のとるべき形態は、そのほかに、現実的な資本制商品が同時に非現実的な、したがって過去の單純商品を意味として内在せしめているという二重性の形態を、かかるものとして、端緒の商品は現在のものであると同時に過去のものであるという形態をもとりうるのである。このことについても、本章の第一節註6において既に批判的に叙べておいた。

端緒の商品が現在のものであるということは、われわれに感性的に直観しうることである。これは現実的商品の外面的直接性である。したがって、われわれの認識の端緒なのである。ところで商品の外面的直接性は、われわれ人間意識に直接なのであって、商品自体にとって媒介的なものにすぎないところの外なる直接性である。商品自体の直接性は、まさに商品自体そのものである。これを内なる直接性と呼ぶとすると、この内なる直接性は、われわれには媒介的であるとしなければならぬ。第一、第二の両節は、商品にたいして、われわれがその外なる直接性に出発して、内なる直接性を実体として分析しだす下向を叙述したのであった。ところで、この到達された本質的実体にわれわれが主体的に立つとき、商品関係は、人間意識を媒介にして主体的になる、自己運動を始める。これが第三節の価値形態の展開過程の論理であり、その叙述の論理であった。ここでは、資本制の商品の実体は主体的に自己反省する。そして自己の起源を過去に求め、「單純なる、すなわち個々の又は偶然的な価値形態」を、自らの歴史的に実在的な端緒とするのである。——わたしが「現実的な学としての資本論」において、立場の転換を第三節への移行において分析しておいたのは、端緒的商品の端緒としての二重性の第二の形態、否、資本論においては本来の形態を、指摘せんがためであった。——このことは、商品という物の具体的一般者とし

ての論理構造からくるのであり、したがつて、過去には単純な形態をとつても現在には複雑な形態をとりうるし、さらに、資本制的制約をも止揚した形態さえもとりうるのである。このことは、先資本制商品でもなく資本制商品でもなく、またソブエットの商品でもないところの、第三の觀念的商品を、ヘーゲルそのままに遊部氏のごとく具体的一般者として考へるのではなく、現在の資本制商品そのものの実体の自己運動として具体的一般者を認むることである。

かくして、端緒的商品は、その外なる直接性としては、われわれの認識の端緒として第一、二節に定立され、内なる直接性としては、商品自体の自己運動の主体として第三節に定立されている。この内と外とを、相互に直接的であるか媒介的であるかの二者を一者として統一したところに、直接的にして同時に媒介的である始元の弁証法が成立するとがるかぎり、始元的な商品は、第一、二節のそれでもなく第三節のそれでもない。しかも、始元の商品が資本論になければならぬとすれば、それは冒頭文節における商品とするほかないであろう。すなわち冒頭文節の商品を本来的の端緒的商品とわたくしが呼ぶ所以である。第一、二節の端緒的商品も、第三節の端緒の商品も、何れも一面的な出发点にすぎず、特に前者に關しては、外的反省の出发点であるかぎり、そこで弁証法を口にする方が間違ひなのであって、むしろ、梶田氏のごとく始元の弁証法の無理解も、かえつて無難とさえいえるのである。

今一つ注意したいことは、端緒の商品を過去の単純商品に求めんとする論者が、遊部氏の批判にかかわらず、今後も跡を絶たないであろうということである。その理由は、資本論においても、マルクス、エンゲルスのその他の著書においても、端緒を歴史的過去に求めるべきことを主張したところの、あるいは、そのように理解した方が自然であるところの、言葉が幾らもあるからである。ところで、これらの言葉が多数あることは、また多数なければならぬことは、マルクス自身が半面にこの歴史的發生の端緒を主張するものであるかぎり、当然のことではなければならない。ただ日本の歴史的端緒説の誤謬は、その説明根拠を第三節の叙述に秘む方法論に求めずして専ら第一、二節の単純商品に求めるときに、發生する。しかも、この単純商品を冒頭文節と區別せずして論ずるところに、その誤謬の許しがたきことは本節本文で指摘したとおりである。第一、二節の単純商品の規定性は過去の単純商品に妥当しうるがゆえに、逆に、先資本制商品が資本制商品の歴史的原因であるというようなたわいなナンセンス振りは問題外であるが、第一、二節に偏執して外的反省の立場から歴史的端緒

説を主張するならば、既にナンセンスなのであって、徹底すれば、たわいのない理論になる必然性にあり、そして、これに自分で気づいたときは、今度は居直って、端緒の問題を論ずることそのことを観念論的遊戯と悪口をたたいて逃げるといふ無責任な「資本論研究家」への途が拓けている。これらの極端な尖鋭的誤謬は、その生い立つ地盤の偏向に基づくのであって、そのかぎりて根源の方法論の偏向を明示するものとしては、却って貴重な前衛的意味さえもっているので、笑ったり軽蔑したりして済ませない。

歴史的端緒を論ずるための正統的な根拠は第三節である。これを無視したり、これに気づかずして、マルクス、エンゲルスの言葉をあちこちと搜索するに苦勞することは、本末の顛倒であって、これこそ観念論的な楽しからざる遊戯であろう。歴史的端緒説のための本来の根拠から無関係に発見された理由としては、たとえ、これがマルクス、エンゲルスにおいては、本来の根拠から現れ出でた言葉であったにしても、かかる外的な理由づけをこととするにとどまる思惟作用は、眞実に学問を成立せしむる思惟の働きではないのである。このような思惟作用をヘーゲルは *Reasonment* として斥けた。ヘーゲルも言ったとおり、「眞実の思惟、すなわち弁証法が、学的進展を内から動かす魂である」かぎり、マルクスにおいても学問的思惟は同様でなければならない。資本論は、体系的労作である以上は、外的関連を内在化してこの根源の事柄が原因となって自発的に諸規定を創造してゆくようなマルクスの思惟の、あるいは、本来の根拠としての実体からの必然性が自覚化されたヘーゲルのいはゆる概念的思惟の、所産であったはずである。すくなくとも、マルクスの学問的な労作の跡を追思惟、ないし追体験さえもできないようなレゾンヌマンや、外的関連の反省のみに固執して、その揚棄のための努力を惜むような反哲学的思惟にとつては、眞実に具体的に全面的に理解できないような仕組みに、資本論とい著述は、古典的なものとして出来あがっているのである。

河上博士は、第一、第二の両節の冒頭商品は「資本論そのものの研究対象たる資本家的社会と全く不可分離的な同時存在をなすもの」(『資本論入門』九二頁)とし、この冒頭商品の「歴史的発展への適応は第三節から始まる」(一〇二頁)とする立場にあり、端緒的商品の本来の二重性にたいして一応は理解のある説をなしている。しかし、この二重性の眞実の理解のためには、端緒的商品の歴史性は、その媒介的モメントとしてのみ把え、商品自体の立場に主体的にたつて歴史的な反省

をするという操作が要るのである。河上博士には、弁証法のこの契機の認識に缺けており、そのかぎりで、その直接性の契機のみを強調として経験主義に陥つたのであった。要するに弁証法の徹底した自覚がなく、外的反省の立場を止揚するのに十分でありえなかつた。歴史を外的に反省するかぎりには、単に時間的な前後関係としてしか把えるほかなく、實在自体の内的ロゴスの展開を、理論の内容とする歴史認識は望むべくもない。したがって第三節の商品自体の内在的論理の主体的把握は、河上博士には欠けていたとせねばならない。そのかぎりでは、第一、二節の単純商品と資本制商品とを見ながら、その単純なる規定性のゆえに資本制的規定性に時間的に先き立つ時代に、それを位置づけるといふ矛盾を犯したのである。すなわち博士は曰く。「第一章のうち最初の二節は、簡単な商品を、それが最も含蓄多き形態において、且つ攪乱的影響により成るべく掻き乱されずに現はれている場合を、撰んだのである。ところで簡単な商品が未だ資本家的商品に転形せず、しかも、それが最も充実した最も含蓄多き、最も多面的な形態で存するのは、資本家的生産の成立の直前である。これを具体的にヨーロッパの歴史について言えば、かかる時期は世界商業と世界市場とが既に成立していた十六世紀に相当する」（一〇二頁）という具合に。

歴史的端緒説を主張するばあいに、第一、二節を根拠とすることの誤謬と不可能なることは、榎田氏について前に指摘したが、かくのごとく、河上博士においてもその例を見ただけである。博士が第一、二節の商品を資本制社会と同時的としながら、資本制直前とする矛盾は、何か外的誘因によつたのではないかと同情的に推察されそうであるが、しかし、右の矛盾も外見のもので、博士としては矛盾ではない。両者とも同じく、歴史的實在を、外的に反省するといふ同一の立場からの思惟の必然性によるのである。ヘーゲルも言う。「反省も、さしあたり孤立的な規定の超出であり関係づけであつて、孤立した規定は、それによって関係のうちに定立される。しかし、その他の点では、孤立的規定は、やはりそのまま、妥当するものとされている」と。これに續けて、「弁証法は、これに反して、内在的な超出であつて、そのうちで有限にして一面的な悟性的規定は、その眞の姿において、すなわち、その否定として示されるのである」（『小論理学』八一節）と批判する。折角、歴史的端緒説の根拠を第三節に求めるまでの認識があつても、この認識が、現実に實在する歴史的過程にたいする外からの反省であつたため、端緒的商品の諸性格を内在的に超出して理解することは不可能であつた。これら凡て、河上博士

の外見的矛盾は、かかる外的反省の立場に揭されている。十六世紀の商品を第一、二節を眺むときに表象に浮べるといふ思想は、必ずしも櫛田氏の所論に誘引されたのみ推察しきれないものであらう。

なお歴史的に過去の單純商品を第一、二節の單純商品の背後に表象するといふ思想を、さらに明確にすると、「生産手段の私有一般」を念頭に置くべきだといふ思想になる。この誤れる思想を前衛的に主張した一人の論者については、本章第一節註6の最後を見られたし。しかし、資本制商品を念頭に常に浮べておくべきだとする反対の主張を、明確にすると、第一、二節を眺むさいには、生産手段の私有一般ではなしに、その資本主義的私有を、判然と念頭に意識して浮べておくべきである、ということになる。資本制商品としての端緒的商品は、その單純商品としての規定性においても、それが、資本主義的に自己疎外された労働の対象化されたもの——賃労働者にとっては、自分に敵対的に対立している資本家の富の、その要素の形態として現れた個々の資本制的商品の單純化されたもの——であるのであるから、このことを十分に自覚して、第一、二節を眺まねばならない。これが、わたしの主張である。

端緒的商品が過去の物であるか現在の物であるかの問題を、——これを第一、第二の両節にかざるにしても——か解明することは、問題自体が本章の目的の外にあるものとして避けねばならないが、ただ、本章の目的とする「感性的所与としての商品」にかかわるかぎりでは、認識論的な角度からだけの解明を試みておきたい。

もともと、下向的な分析あるいは帰納といい、上向的な綜合あるいは演繹といつても、ともに同一対象にたいする二つの認識論的な方法であり、マルクスがこの区別される二つを、その同一性において統一して、マルクス固有の思惟様式を打ちたてたまでであつて、かかる弁証法的思惟によつて下向的に研究される対象も、上向的に演繹される対象も、ともにマルクスによつて感性的に直観されていた同一の現実的对象としての近代社会であり、資本制生産様式に支配される環境的社会であつたこと、上述してきたところである。この現実的な社会環境が、われわれ感性的に現実的な人間には、資本、貨幣、ないし商品という感性的な物としてのみ直接的に与えられて

いるのであって、下向的分析とは、物的環境として現象する社会関係において、その本質的人間関係を帰納的に抽象する思惟作用であり、上向的演繹とは、社会の根源にある人間関係が、如何にして物的関係として社会の表面において実存的に現象するにいたるかを、抽象的原理から一段階一段階と総合しつつ具体化してゆく思惟作用であり、物的関係に自己を疎外する人的関係は、根源的な事柄として生産過程に横なり、疎外の状態としての物的関係は、根源的な生産過程における階級的な人間関係の否定として、流通過程における資本の諸形態、とくに資本の貨幣的形態をとるということ、このことも、第三巻を本稿前節において「資本の外面的直接性」という視角から述べてきて、読者とともに知ってきたところである。ところで第三巻によれば、現実社会の表面においてわれわれに直観されるところの資本の諸形態、すなわち、産業資本、商業資本、貸付資本は、感性的所与として、何れも個々の諸商品の集積あるいは集成である。個々の諸商品もまた、その現実的形態は、さらに無限に多種多様であつて、これらの直観的に雑多な諸商品の流通する世界において、集中し分散する場所と、かく機能する実体との特殊性において、市場の諸形態、——すなわち労働市場、商品市場、ないし資本市場——が、また資本の諸形態が、成立していることが判断されるのである。

かくて、資本が諸商品を集中せしめたり分散せしめたりするの機能実体とすれば、諸商品の認識が直接的であるにたいして、資本の認識は媒介的であり、感性的な諸商品の流通状態の判断を媒介して、それは、始めて認識される外面的現象の奥にある本質でなければならぬ。資本が物としてわれわれの感性的直観に与えられるといつても、それは諸商品の集積としてであつて、商品の形態において疎外されたかぎりの資本であるはずである。したがつて、諸商品の集成の仕方の特殊性に、資本の諸形態が感性的に疎外されて現れるのである。とすれば、現

実社会の表面における現実的な社会的総資本の外面的直接性は、諸商品の集積と流動とであるとしなければならぬ。それだけでない。このように見ることによって、資本制社会の表面はその全き広さにおいて見渡され、その外面性はさらにわれわれに直接的となり、諸商品の集積と流動との仕方は一層具体的に現れてくることになる。これは、カントが感性的直観の形式 *Anschauungsform* とした空間の、その全面において展開される商品世界といえるであろう。この現実的な商品世界を展開せしめている直観形式、すなわち、われわれに最も直接的な地平 *Horizont*、これこそが第三卷の総合的演繹の目的とした到達点であった。この地平において、諸商品は資本の機能によって流動するのであるが、これらの諸商品が単に利潤、利子として流動するだけでなく、さらに、別に地代としても流動するのを、感性的に直観するとすれば、この直観的所与を媒介として、これら諸商品の特殊なる集成の中核的実体である土地所有者の存在を、資本家諸集団のほかに並列させて認識することができる。そして、このような全き広さを余すところなく見渡したホリゾンにまで、第三卷の第七篇において、その上向的叙述が始めて辿りついているのである。すなわち、それは、現実的資本の「われわれに最も直接的な外面性」としての終極的な商品の世界であったはずである。

ところで、われわれの感性的直観の空間形式としてのこの地平に、流動し集積される諸商品は、われわれによって個々別々に差別されうる具体性にある。すなわち、われわれの感覚によって質的に見分けられる無限の数において、具体的に個々別々になければならない。のみならず、個々別々にしめすその特殊的具体性の差異性においても、単に質的にだけでなく量的にも無限の多様性にある。否さらに、質と量との統一の仕方において無限の多様を示さねばならない。ところで、ヘーゲルは『論理学』の「有論」において、このような質と量との直接

的に統一されている状態をば、尺度 *Maass* と呼んでいるのである。そして『論理学』叙述の、この尺度の段階において、質は量へ、量は質へと直接的に移行する論理が、展開されているのであるが、この移行の諸関係あるいは諸結節としての雑多な規定性は、「質の外面的直接性」であって、ヘーゲルはこれに、現実的な事柄の外面的な状態を、いみせしめていくにすぎない。ここでは諸規定は相互に全く無関心であり、そのかぎりて無差別的な純粹量でも同時にあるとされる。測定 *messen* される世界のこの量的側面を、ヘーゲルは、絶対的無差別 *solite Indifferenz* と呼んで「即自的には有の凡ての規定を止揚しているところの全体性」とした。したがって、外面的直接性としての質的諸規定は、相互に無関心であるかぎりて、絶対的無差別としての全体性——これにたいても無関心なのであるが——のうちに、自らを止揚して消滅すべき存在であるということになる。かくして、資本制社会の外面的直接性としての商品世界も、このようなヘーゲルの尺度の論理構造にあるものとして、商品群の示す無限の多様性は、その基体に無差別的な全体を前提し、しかも、これと直接的に同一であるという単なる状態性にすぎないとせねばならない。そして、この無差別的全体性が、外的反省の立場において、われわれの感性的直観の空間形式となるのである。したがって現実社会の表面の全地平を、一つの全体として直観するばあには、それは、無限の多様の限りなき、相互に無関心な散在であり、そのかぎりて、混沌たる雑多の一つの全体表象を、われわれは受容するほかないわけである。諸商品の流動し集積する世界のかかる混沌たる雑多は、その外面的状態の変化として、単なる直接的移行 *Übergang* にすぎないが、さしあたり最初には、個々の商品がわれわれの感覚に与えられるかぎりの物の質的屬性、すなわち、われわれの欲望に直接に訴える物としての有用性の視角における直観的所与であるが、かかる有用性という感性的欲望に訴える物としての質を捨象するばあいに

も、事態は何ら変らない。商品は、単に有用物として単にわれわれの消費の対象として存在しているのでなく、同時に、相互に交換され、あるいは流動し、あるいは集積されて、それらは、現に流通しておるか、流通を目的として蓄積されている。そして、この交換現象こそが、商品の単なる有用物でなくして商品としての物である所以であつてみれば、現実社会の外面性としての地平に展開される商品世界とは、諸商品が、その個々別々の静止する姿においてでなく、流通する動的状态において実在する絶対的無差別性としての一つの全体性でなければならぬ。すなわち、個々の商品は交換されている姿において、あるいは交換さるべきであるという属性において、すなわち価格をもつ物として、われわれの感性的直観の空間的形式に与えられているはずである。このばあいに、おいても、すなわち、物としての諸商品の質的屬性が捨象され、量的屬性においてのみ見れるにしても、それだけの価格は、量的に千差万別であり、さらに交換において果す資本の機能の如何によつて、質的雑多を新たに添加するわけであるから、かゝる諸商品の流通する世界そのものの感性的直観は、依然たる雑多の混沌たる全体性の一つの表象であるほかない。そして、このような具体的な諸商品の現実的世界が、近代資本主義社会の社会的総資本の表面的現象として、第三巻の終極的叙述において展開せられているのである。

7、本稿「諸商品集成の感性的直観」の擧筆後、九月末に立命館で開かれた「経済学史学会」西日本部会における報告を、たまたま、わたしが担当することになり、「商品の端緒としての二重性」という演題を択び、このテーマ、すなわち、「端緒の商品が資本制商品であると同時に、先資本制商品でもある」と主張するテーマのために、この問題をエントウエーダー・オーダーの関係に見てきた従来の論争を知つておく必要が生じ、これに関する諸資料に眼を通してみる気持ちに漸やくなつたので、このとき初めて読みえたかぎりの諸説について、わたしの主張との差異を明示するだけの部分的諸批判を、断片的ながら備忘録のいみで、ここに註記として挿入しておくことにした。それは、宇野弘藏氏、向坂逸郎氏、宮川実氏の三教授の

所説にたいする部分的批判であるが、自ら主要論点が、資本論の叙述ならびに研究の端緒における論理と歴史との関連の問題に集中することになったが、このテーマは後章「資本の生産物としての現実的商品」に残して予定してあるもので、そこに註記するのを寧ろ適當するが、本稿執筆のためのわたしの立場を事前に読者に理解して貰うためには、必ずしも不適當な処置ではない。ただ、本章本文の論述内容が、このテーマにたいして一面的であるかぎり、部分的批判は、さらに一面的なものに制約されるほかなかつた。この点、右の三教授に前もって御詫びをしておかねばならないところである。なお、学会で報告した内容には、三教授その他諸氏にたいする批判は含まれていなかったのであるが、これは他日、機を得て何処かに発表するつもりである。これと併せ読まれるとき、以下の断片的批判の、内容的な意味ならびに必然的な動機も、十分に理解して貰えると思つてゐる。

先ず宇野弘藏教授の著書『価値論』に初めて接するわけであるが、この書において教授は次のごとく述べてゐる。

——「商品経済を、真にその生産的基礎において理解しようとするれば、商品経済が一社会の支配的形態となる資本主義社会を採つて、これを分析するほかないのであるが、この場合に吾々は、資本主義社会を一挙に説明するわけにはゆかない。複雑な現実的關係を分析して単純なる關係に抽象したものから出発しなければならぬ。マルクスが資本論を第一章商品から始めたのも全く斯る方法を示すものである。……この最初に採つた商品は、資本家的商品を採用したとしても、それは現実の資本家的關係をそのまま採つた例えば第三卷に現れるごとき商品ではない。それは当然に斯かる資本家的關係を捨象した抽象的なるものであるが、この場合の抽象的なる商品は如何なる性質を有するかということを考へておかなければならぬ。それは勿論いわゆる単純なる商品のごとき具体性を有するものでない。實際また単純なる商品は、決して資本家的商品のごとき全面的な交換關係を有するものでもなければ、また生産自身を社会的に商品生産として規制するものでもない。したがって資本家的商品から商品自身の規定だけを抽出したとしても、それは決して資本家的生産以前の所謂単純商品となるわけでない。歴史的には依然として資本家的生産關係に規定せられた商品であつて、単に資本家的關係から抽象され、あるいは又すすんで貨幣形態自身からも抽象されたものにすぎない。したがつて又あらゆる社会形態から遊離したというような商品形態ではなく、むしろ資本主義的生産關係の中心基軸とも云うべきものを純粹に表示するものとしてあるわけであ

る」(二二—三頁)。——

右の引用句のうちに二、三の追求すべき不明の点はあるが、第一、二節の商品を、第三卷に現れる現実的商品からの抽象であるにしても、資本主義の生産関係に規定された実在的商品とする点では、わたしと一致する。——ところで遊部氏は、これを観念的商品とする(『価値と価格』八二頁)が、これは宇野批判としては当らぬと、わたしは思う。——そして、この資本主義的に規定された商品の抽象的規定性が、先資本主義的な過去に実在した単純商品に妥当することも、教授は勿論のことであるが知っている。すなわち、

——「資本論第一卷の最も簡單なる商品は、資本家的社会の無数の商品から一個の商品をとってきたものとして、同時にまた商品の歴史の発生期に見られるものとの共通な点を有するものとならざるを得ない。それは、いわゆる単純なる商品の性質をも始めて明確にしうる抽象的規定を有するものではあるが、決して、それ自身かかる単純なる商品としてあるのではない」——(二五頁)。

ところで、わたしによれば、端緒の商品は同時に「それ自身かかる単純なる商品でもある」のである。このようなことを卒然と主張すれば、教授は恐らく一驚されるであろう。しかし、一驚するのは、教授だけではなく、一般に、端緒の商品を、その本来的な位置づけとしての冒頭文節と、外的反省の立場からそれを対象として前提する第一、二節とを無差別的に片づけている極めて多くの論者にも、共通であろう。のみならず、わたしといえども、端緒の商品を第一、二節の立場に限定するかぎりにおいては、かかる主張の不可能なることを知っているのである。かかる主張の可能なのは、第三節の叙述に秘む歴史的反省の論理によること、本節前註6によって、読者は漸次あきらかに推察されてきていることであらうと思う。なお次の註りを見られたい。しかし、このことについてのわたしの積極的論述は後章に予定されているわけであるから、ここでは、商品の歴史的認識における宇野教授固有の無理解さを指摘しておくにとどめたい。

教授は、右の第二の引用句と同一文節において、抽象的規定性における資本家的商品が「歴史的に単純なる商品と同一のものでない」というのは、単純なる商品が、それ自身に資本家的商品への発展の動因を有するものではないという点でも明らかである」と言う。このことの誤謬については、宮川実教授(『資本論研究』第一分冊、三六頁)も、遊部氏(『価値と価格』

八三頁）も正当に指摘しているが、このような反マルクス主義的主張が、宇野教授に如何にして如何なる理由によって生じたかは、始めて教授の所説に接したものととして、わたしには推察のかぎりではない。ここでは、このことに関連させられて、商品についての教授の歴史的認識が如何なるものであるかを、たどっておくにとどめるほかないが、それについて次のような言葉を拾いだすことができる。

——「吾々は、生産物としての財貨が如何にして商品となるかは、具体的に歴史的に規定するより外はない。論理的に財貨が商品に転化せられなければならない必然性は財貨そのものにはない。生産物の余剰が生ずるといっただけでは必ずしも商品となるとは限らない。」（一〇頁）——

この言葉は、生産物の商品への歴史的転化の論理的必然性について、まったく無理解であることを物語っている。そして、ここで歴史的ということをも、一般に非論理的なものとして、したがって、そのかぎりてただ偶然的なものとして、理解しているかのごとくである。

しかしながら、偶然性ということも、或る内容の外面性のみかかわる規定である。現実的な何らかの事柄において、外が内から区別され、この内容から切り離されたときの形式だけの規定、したがって、非本質的な外的直接性を偶然性というのである。それは同時に単なる可能性でもある。原始共同体が相互にその生産物の剰余を交換するといふとき、その有用性、他者のための使用価値が条件となっているわけであるが、これは生産物が商品になるための形式規定であり、生産物が相互に交換されるための単なる可能性にすぎない。この単なる可能性としての外的条件を偶然と呼ぶのである。しかしながら、生産物が商品として交換されるための内的条件は、これらの生産物に種族的労働が対象化されているといふことでなければならぬ。——勿論、このことは、対立的な共同体相互の間のことであるか、あるいは同一社会内ならば、分業の発達を前提としてのことであるか、の事柄であるが。——具体的労働の成果でないもの、労働を費やさずして獲得される物は、かりに、それが如何に稀有にして高貴のものといえども、生産共同体相互間においては、最初に交換の対象にはならなかったであろう。もし交換されたとすれば、これこそが正しく偶然であって、交換の現実化するための必然性は、すでに交通関係にある双方の共同体それぞれの種族的労働が各生産物に対象化されているという事柄そのものにある。この事柄は、生産物が

他者のために有用であるという外的条件と、やがて自覚さるべき本来の種族的労働がこの有用物に対象化されているという内的条件とが、統一されたところの総体である。この総体的な事柄が交換ということの内容であつて、この事柄にあるかぎり、相互に交換さるべき実在的可能性にあるといふべきである。かかる実在的可能性こそは、その単なる一つの外的モメントにすぎない社会的使用価値の個性性が、単なる可能性として偶然性であるにたいして、必然性を自らの働きとして持っているものである。すなわち、生産物が人間の具体的労働の生産物であるかぎりで、交換可能の実在的根拠を常に自らのうちに持っているのであり、原始共同体相互間において人類史の最初経験として行われた第一回目の偶然的な交換といえども、かかる実在的可能性の現実化したものとしては、それは歴史的に必然であつたとせねばならない。これが商品発生論の論理である。したがつて、「生産物の余剰」ということは、これだけでは、宇野教授の言うとおり「必ずしも交換のための必然性とはならない」。しかし、それは商品発生のための一つの外的条件でなければならぬ。にもかかわらず商品発生論の必然性は「財貨そのものうちにない」のではない。要するに、これらのことは、宇野教授は、商品の歴史的发生の論理的必然性を認識することができていないからだとせねばならない。また教授は、歴史のこととを、必然性において把握することができないかぎりで、次のごとくに主張している。

——「商品生産でも価値を形成する労働としての抽象的、人間労働は、かくして商品形態が、最初は、いわゆる自然経済の余剰物を商品化すといつた外部的な偶然的なものにすぎないところから出発して、中世紀的な職業的分業の段階を経過し、最後に資本主義的商品経済として内部的な必然的なものとなる、この歴史的過程の内に漸次に明確なる物質的基礎を得てくると理解しなければならぬ」(一二三頁)。——

そして、この引用句から、さらに、氏が商品の歴史的必然性を、単にその資本主義的普遍化にのみ限定して、偶然的なるものと必然的なものとの弁証法的関連の論理を、公式的にそこに適用していることに、われわれは気づかされる。すなわち、マルクスの、或はヘーゲルの、公式は弁証法ではあつても、宇野教授によるそれらの適用の仕方ないし考え方は、非弁証法的なのである。ところで、商品の歴史的必然性は、その発生から発展の諸段階のみならず、その消滅についても、一貫して主張することが、弁証法的唯物論の常識であるし、しかも、商品の発生および発展の必然性の論理こそは、マルクスが

資本論の第三節の發生的叙述の方法論としたことについては、周知のことと考えてきたわたしは、宇野教授のかかる主張に接して戸惑いさせられざるをえなかつたものである。そこで、教授が右の第三節を如何に解説しているかに一読を誘わたるわけであるが、教授の『価値論』における「第二章、価値の形態」の「一、簡單なる価値形態」を通読して、マルクスの第三節叙述の方法論が完全に無視されていることに、一驚させられた、ものの同時にまた、宜なるかなと納得した次第である。

教授の解説の方法論的原理は、「商品は、これを見る者の立場の如何に関らず、その性質によって動くのであるが、それは決して所有者非所有者の関係を超越して動くものではない。科学的に分析するという場合にも、この動きに従つて之を分析する外はないのである」というのであるが、この解説方法の何んと非マルクス主義的であることか!!ここで、これにたいして改まって批判する必要もないが、わたしとしては、「所有者非所有者の関係を超越して」商品の自己運動することを、マルクスから資本論第三節において詳細に学んでいる。勿論、氏の『価値論』は、わたしの「現実的な学としての資本論」（拙著『資本論の学問的構造』所収）以前のものであり、氏が現在もかかる誤つた方法論に自信をもたれているか何うかは知らない。ここでわたしは、「商品の所有者非所有者の關係」が、自己運動する諸商品の人格的表現であり、人格的表現における諸商品の關係であるにすぎないことを主張しておくだけで、そしてマルクス自身が読者に向つて、第三節を誦むばあいは特に弁証法的意識を鋭くしてかかるべきことを、要請していることを注意しておくだけで、——これ以上の批判を教授の第三節解説にたいしてする責任は、すくなくともわたしには右の拙著論文によって免れているものと信ずるので——教授の所説に一面的に関説することを、打ち切りたい。一面的な欠陥の指摘が具体的批判にならないことを、わたしは十分に知

つてゐる。
8、ヘーゲル『大論理学』（邦訳）第一巻「有論」、第四章「尺度」、五五三—六三頁、六三九—五七頁。

なるほど、資本論第三巻における終極的叙述は、社会的總資本がその全規定を實現したかぎりの商品世界を、われわれ読者に展開して見せてくれたものである。しかし、この真に最も具体的にして最も現実的な商品世界と

いえども、われわれに直観されるかぎりのその外面的直接性としては、一つの混沌たる雑多の綜合された全体でしか、すなわち、絶対的無差別性としての没尺度的全体によって裏づけられた直接的諸規定の無関心的散在でしか、ありえないはずだといふのである。これに反して相互関心的な諸規定は、思惟を媒介にしてのみ把握しうる本質性 *Wesenhaft* であり、これが現象するといつても、われわれの思惟意識にのみ始めて現れうるにとどまる。

そして直観の領域に現象したかぎりの現実的商品世界が、複雑な尺度關係と多様な移行状態とで交錯しているにしても、右に叙べてきたように、共通的には、有用物の相互交換という事態の現象であるとすれば、これは、あたかも「商品の二つの要素、使用価値および価値」の現象する世界そのままであつて、第一巻の第一節の分析的叙述が展開しているところの商品世界と、何ら異ならないことに、われわれは気づくべきであろう。二つの商品世界の事態は全く同一であり、否、われわれの感性的直観の所与としては、ただ一つの同一の商品世界が、そこに有るだけだとせねばならない。あるいは、そこに差別があるとすべきであろうか。したがつて、二つの異なる商品世界が存在すると考えねばならないのであろうか。

勿論、そこには差別が全然ないわけではない。資本論の叙述のうえの内容としては、確かに差別はある。そして、これは誰にも容易に発見できる。すなわち、終極的諸商品の展開する世界の第三巻における叙述内容は、第一巻で端緒的諸商品を分析した叙述内容に比較して、後者が単純な規定性にあるにたいして、前者における規定は複雑である。しかし、この複雑であるか単純であるかの差異は、規定性の差異、すなわち、われわれの認識作用における思惟規定の差異であるはずであるから、感性的直観の対象として、くだいて言つて、眼の前に、二つの商品世界がある、と推論することは無理であろう。それにしても、終極的諸商品の世界には、端緒的商品の世

界にないもの、すなわち第一巻の第一、第二の両節において分析の対象になつてゐる諸商品を、普通としたばあの例外的に特殊なもの、すなわち、商品としての労働力、貨幣、あるいは銀行巻、手形、証券など資本自体のとする商品形態、さらに売買されてゐるところの、土地やその他の自然的産物、等々があるではないか、したがつて、対象的にも異なると言ふべきであらうと、或は反論されるかも知れない。したがつて更に、これらの複雑な規定をもつた特殊な諸商品は、普通の商品とともに、内容の豊かな商品世界を構成し、そして、その豊なる内容のまま、われわれに直観的に受容され、われわれの生活において直接に体験され、かくして、われわれの生活を具體的ならしめてゐるのでないか、と攻め寄せてくる論者があるかも知れない。しかしながら、この複雑にして豊富な規定性こそは、社会的総資本の諸形態が、その外面的直接性としての商品世界において取る実体的資本そのものの規定性であり、実体的資本に内在的な諸規定がその自らの商品形態において疎外されて現象した世界にすぎないのである。ところで、これらの資本としての規定性は、前述のごとく、われわれの悟性的判断意識において始めて現象するのであつて、われわれの感性的な直観としての意識には、直接的には現はれ得ない。現はれ得たかぎりでは、資本としての諸規定の捨象されたところの、否、その諸規定の内容が捨象されて形式だけであるところの内容——カントならば、所与としての雑多なる感覚的質料、ヘーゲルならば、質の外面的直接性、——、ただ、これだけである。すなわち、内容のない内容として、ただ、そこに有るといふこと、すなわち、ヘーゲル『論理学』において抽象的無関心性を位置づけた「有論」における定有 *Dasein*、あるいは定有するもの *Disseinde* のカテゴリーによつて理解さるべき段階の事柄でなければならぬ。そして複雑な諸規定の諸商品が、その諸規定の内容を問はずして、ただ、そこに有るといふこと、このことは要するに、それらの独自の実体的諸

規定が、単に外面的な諸々の状態に引き下げられて質的な雑多になったことであり、一つの状態から他の状態に移行する変化のうちに自己同一として定立されるものが、没度量的な無差別的全体性にすぎない、ということはいみする。そして、終極的諸商品の世界のこの質的雑多性が、われわれの感性的直観に、一つの混沌たる全体性の表象として与えられるはずのものであること、ここに繰りかえし述べざるまでもないであろう。

9、端緒的商品が資本制商品であると同時に先資本制商品であるという主張を、明確に示している人に向坂逸郎教授がある。

「経済評論」誌七月号の「単純なる商品について」における教授の所説は、かかる主張を意図する点において、わたしと一致する。ところで、この意図を実現するための方法において、すなわち、この主張のための論証において教授は、まことに苦しい無理をしている。しかしながら、端緒的商品を一面的に資本制商品として了って満足せんとする戦後の一傾向に抗するかぎりでは、したがって教授の意思の具体性的であることにたいして、敬意を表するとともに、端緒的商品にたいする教授の歴史主義的把握の論拠となつているところの、マルクス、エンゲルスの重要な言葉の若干を、教授に教示されるままに引用しながら、わたしの方法論を教授のそれに対質せしめるための批判の筆を、すすめることとしたい。

——「資本が存在し、銀行が存在し、賃銀労働も存在するにいたつた以前に、貨幣は存在することができ、また歴史的に存在した。だから、この側面からすれば、ヨリ単純なる諸範疇は、未発達の一全体の支配的諸関係を表現しうるもので、それらの関係たるや、当の全体が、未だヨリ具体的な範疇に表現されているような方向にしたがって発展しない以前に、すでに歴史的に存在したものだといふことができる。そのかぎりでは、単純なものから複雑なものへとよじのぼる抽象的思惟の法則は、現実の歴史的過程に対応する」。(マルクス『経済学批判』「序説」の「経済学の方法」) ——

マルクスは、ここで論理的なものと歴史的なものとの一致の思想を、展開している。したがってエンゲルスが、この「経済学の方法」を次のごとく解説するとき、論理の歴史的契機を強調したものとせねばならない。

——「われわれは、この方法を用うるにあたって、われわれに歴史的に事実上あたえられた最初の、また最も単純な関係から、すなわち、われわれが見出す最初の経済関係から出発する。この関係をわれわれは分析するのである」。したがって、

「経済学は、商品をもって、すなわち、生産物——個々の人のものであれ、或は原始的共同体のものであれ——が、相互に交換されるところの契機をもって、始まる」。 (エンゲルス『資本論綱要』) ——

エンゲルスのこの解説を許すマルクスの言葉として、

——「われわれは、まず資本主義的生産の基礎たり前提たる商品——生産物の特殊なるこの社会的形態——から出発する、われわれは個々の生産物を手に取り、且つ、それが商品として含むところの形態規定性を分析する。……生産物の商品への転化は、唯ぼつりぼつり行はれるだけで、それも、生産の余剰にだけ、または生産の個々の部門(工場手工業生産物)にだけ、渉るのみ等々である。生産物は全般的には、商取引品として過程に入りこむこともなければ、また全般的にかようなものとして過程から出てくることもないのである。けれども、生産物の商品への発展、商品流通、したがって、或る程度まで発展した商業は、資本形成および資本主義的生産の前提であり、出発点である。われわれは、資本主義的生産の最も単純なる要素としての商品から出発するのであるから、資本主義的生産の前提としての商品を取り扱うのである」。 (マルクス『剰余価値学説史』第三卷、邦訳一三六—七頁) ——

しかし、ここでもマルクスは「経済学の方法」からの先の引用句におけると同じく、単に現実的資本の生産物であり結果としての商品、すなわち「資本主義的生産の最も単純なる要素としての商品」にたいする認識論的出发点としての単純なる規定性が、「資本形成あるいは資本主義的生産の前提」としての、すなわち資本の前提あるいは原因としての、単純商品に妥当し、したがって「それを取り扱う」ことにあるというだけであって、歴史的過去の存在として単純商品からの出発のための方法論的論理を展開しているわけではない。言い換えれば、資本の前提たり原因たる商品から資本論の叙述を出発せしめる思想は展開してあっても、この実在的な因果の歴史的過程が、如何にして、資本論叙述の出发点を成立せしめるかの論証が、そこに展開されてあるわけでない。このことは、エンゲルスの先の引用句においても同様である。しかしながら、マルクスおよびエンゲルスのそれらの箇所において、論証は欠けていても、資本論叙述の歴史的出発に関する思想が、マルクスにもエンゲルスにも有ったこと、また無ければならなかったことは、事実として承認せねばならないのである。このいみで、向坂教授が「エンゲルスは資本論の出發を、歴史的に事実上存在した最も単純な經濟關係に求めている。それは八相互

に交換されるところの契機Vであつて、商品である。そして、これは、われわれが経済学で分析し初める（最初の経済関係Vである）（頁段）と主張することは当然であり、一面的には極めて正当であり、端緒的商品の解明における非歴史主義的偏向を是正する他の一面の指摘としては、極めて重要な主張といわねばならない。

では教授は、この非歴史主義的偏向を克服するために、如何なる論証を試みているか。

——「資本論は言うまでもなく、資本主義の経済的運動法則を明かにしようとするものである。すなわち価値法則の貫徹される有様を分析するのである。だから、それは単純なる商品から出発するほかにない。しかし実際には、資本主義の中には単純なる商品は、そのままは無い。なぜかというに、資本主義の中では、すべての商品が資本の生産物であるからである。そこで、資本論は、資本の生産物としての商品から単純なる商品を抽象しなければならぬ。これは一つの科学的な操作である」。（前掲誌四頁）——

この最後の言葉から推察すれば、教授は、このばあい、資本論第一篇の第一ないし二節を念頭においていると見なければならぬ。わたしは、第一、二節から第三節を方法的に区別し、第三節の単純商品も一つの学問的な操作の所産と見るが、教授はこの問題にまで思索を進めていないと、わたしは推察し、この推察の仮定のもとで批判を始めた。

ところで、「資本主義の経済的運動法則としての剰余価値の法則のうちに、価値法則の貫徹される有様を分析すること」に、資本論の目的を限定しうるかは——ただ第一篇に關するかぎりでは問題ないことであるから、これを消極的に承認しよう——別として、教授は、「価値法則の貫徹される有様を分析するのであるから、それは単純な歴史的商品から出発するほかない」として、第一、二節の単純商品を解明することは、果して論証になつてゐるであろうか。後に述べる理由によつて、第三節の単純商品にたいしてならば、かかる解明も妥当しうとするのが、わたしの主張であるが、教授にあっては、かかる解明によつて、第一、二節の商品が、現実的な資本制商品の抽象であると同時に、過去の単純商品でもあるとするのである。すなわち、右の引用句に続いて、

——「資本主義の現実の中には、そのままの姿ではないものであるが、われわれが歴史的事実としてその存在を確定しうる単純なる商品は、この抽象——一つの科学的操作——を可能にする。歴史上現実に存在した単純な商品を、資本主義の中

で取りあげて価値法則を確定し、その変貌を明白にするのである。かくして、資本論の初めに取りあげられた商品は「資本主義的生産の最も単純な要素としての商品」であるが、それは歴史上現実に存在した資本主義以前の単純なる商品でもある(四頁)。

価値法則を確定するためには、資本の生産物としての複雑な規定の商品を単純化するという抽象作用で十分であるはずである。この目的のために、歴史上存在した過去の単純商品を第一、二節に必ずしも持つてくる必要はない。ここにマルクスの弁証法的論理としての認識論の強味があるのである。過去の「単純なる商品の分析なくして資本主義的商品の分析は不可能である(四頁上段)」とする実証主義は、マルクスの「ヨリ単純な諸範疇は未発達の一全体の支配的な諸関係を表現しうる」とする方法論の、かえって否定にならないか。それとも、単純化された抽象的規定性が過去の単純商品に妥当するとしても、検証されなければ果して妥当しているか否かは不明であるとしても、教授は考えているのであろうか。検証をまって初めて確実になる作業仮説として、「経済学の方法」におけるマルクスの抽象作用をば、理解しているのであろうか。外的反省の科学的立場にのみ止まるかぎりで、このように考え理解することは自然でもあろう。ここに「歴史的事実としてその存在を確定しうる単純商品が、マルクスの抽象——科学的操作を可能にする」と教授の主張する所以があるかのごとくである。そして、マルクス自身においても、第一、二節で行った科学的分析としての抽象作用は、外的反省にとどまるかぎりのものとしては、仮定的な成果しか生みえない。だからこそ、第三節における論証の上向的叙述が、その論証として初まったのである。しかしながら、教授は、この弁証法的な抽象——綜合原理的分析、あるいは演繹を同時に意味する帰納としての弁証法的分析——を、単に悟性的に把握しておいて、これを「科学的操作」と呼んでいるかぎりでは、教授自身は、マルクスに背いて、再び同じく外的反省の立場から、抽象的単純規定の妥当性を、過去の商品関係の実証的研究によって検証するという方法に赴くほかはないであらう。

この実証主義は、しかし、右の妥当性を事実として実証したとしても、何故に妥当するかの権利を論証しうるものでない。「マルクスの方法は論理的である。しかし、その論理的な態度自身の中に歴史的なるものが含まれている」(五頁上段)と教授も語っているが、マルクスの歴史的なものとは、かかる実証的な歴史主義ではない。しかも教授の「科学的操作」な

るものは、それが外的反省の立場のものであるかぎりで、歴史的に実証されたものを再び資本制商品のなかに、マルクスのごとく抽象的規定自らの具体化という総合的演繹によって——第三節の端緒としての単純商品がこの方法によるのであるが——ではなく、抽象的規定そのままに機械的に演繹する。教授の言表によれば「歴史上現実に存在した単純商品を資本主義の中で取り上げる」という調子で、直接的に、無媒的に、論証なしに、過去のものを現在のなかに秘みます。また別の個所で繰り返して曰う。「資本主義の論理的出発点として、資本主義そのものの中に存しななければならない商品の法則が、歴史上現実に存した単純商品と同一の条件を資本主義の中におくことによって、明かにされるのである」（四頁下段）と。

これが第一、二節の方法論的解説として主張されているかぎりでは、明白に誤謬であろう。

以上は、資本論叙述の論理の出発点が同時に歴史の出発点でもあるとするばあいの、向坂教授の甚だ不明瞭な論証を、詮索的に解きほぐしたまでのものである。或は教授の論証は、もっと単純なつもりなのかも知れない。そこで試みに、その論証と見るべき今一個所の文章を引用しよう。

——「資本論第一巻第一篇は、この単純商品生産を歴史として分析しようと志したものではない。それゆえにまた、資本論冒頭にいう商品は \wedge 資本主義的生産の最も単純な要素としての商品 \vee であって、歴史上現実に存在した商品生産のそれなのではない。この意味で資本論冒頭の商品は抽象的である。 \wedge 資本の生産物としての商品 \vee の中から、その中に内包される \wedge 資本主義的生産の最も単純な要素としての商品 \vee を取り出しているからである。しかし、ここに取り出された商品は、現実に歴史的に資本主義社会の成立の前提をなして存在したのである。この意味では、資本論冒頭の商品は、また歴史的でもあって、現実に存在したことが確証されるものである。それは現実に、歴史的に資本主義の成立の前に存在したのである」（五頁下段）。——

この文章は、前の論証の文章よりも更に曖昧な規定で綴られている。「第一篇」というが、第三節を意識的に第一、二節と区別して含めたものでないであろう。「冒頭商品」というのも、冒頭文節の商品ではなく、「抽象的」と規定されたかぎり、第二パラグラフ以下の単純商品をいみするのである。ところで、資本制社会において \wedge 資本の生産物としての諸商品 \vee の中には、先資本制単純商品の混在していることを認めて、これを「取り出す」のではなくして、資本制の規定からの

「抽象」のいみで「取り出す」のであるとするならば、この「ここに取り出された商品」が如何にして「現実に資本主義社会の成立の歴史的前提をなして存在していた」と言えるのであろうか。前にも指摘したとおり、資本の結果としての商品の抽象的規定性が、資本の原因としての単純商品に妥当し、その存立を確実にするにしても、このことは決して、資本の原因として存在した商品が、資本の結果としての商品であるということの、論証にはならないのである。とすれば教授は、何らの論証なしに、歴史的に存在した単純商品は、単純化された規定性にある資本制商品と実体的に同一である、と主張しているに均しい。この無論証無媒介な直接的同一化は、マルクスの弁証法とはおよそ無縁でなければならぬ。論理を喪失したコジツケの感さえ覚えぬであらうか。

教授の考え方は、譬えて言えば要するに次のごとくになるうか。——人間の細胞の抽象的規定性は、アミーバの全具体性に妥当する、すなわち、アミーバの存在が確定される。したがって、アミーバの存在の実証こそが、人間の細胞の複雑性を単純化する科学的操作を可能にする。故に、人間の生理学的構成の研究の出発点は、人間の細胞でなくて、アミーバである。——しかも、ここで、人間の細胞であると同時にアミーバでもある、と両者の無媒介的同一化が主張されているのである。そして、かく主張するための論拠となるものは、何であるか。人間の細胞の抽象的規定がアミーバに妥当することをもって、人間の細胞とアミーバとの対象的存在としての同一化の可能性が、マルクスによつて説かれたかのごとく誤解している、この誤解自体の外に、その論拠となるものはないのである。この点については、河上博士の明快な解説を想起する必要がある。すなわち、

——「資本論の研究の出発点をなせる最も捨象的な範疇としての商品は、六、七千年前に初めて歴史上に現れた最初の商品ではない。それは、資本家的社会という具体的な生ける全体から独立して存在する単なる個々の商品——高度の発展を遂げた生物（たとえば人間）を前提せずして生存するところの、独立な生物としての単細胞動物——ではない。最も発展せる商品生産社会を前提せずして存在しえないところの、最も捨象的な範疇としての商品は、人間の成熟体を離れては決して存在しえないところの、かの卵細胞に類似する。だから、われわれの研究は、最も捨象的な範疇をもって始まるにしても、そのさい社会が——最も豊富な具体物としての資本家的社会が——常に前提として表象に浮べられていねばな

らないのである。』(『資本論入門』九八頁)――

向坂教授に、かかるマルクスの言葉を知らないとする非礼を犯すのではなく、マルクスの言葉を理解する方法論において、河上博士の論理主義の方が、明快であるとするにすぎない。そこで一歩ゆずって、素直に教授の全文を眺みとることにしよう。そうすると、次のように要約できそうである。

教授も強調されるとおり、資本論叙述の出発点を、単に論理的に理解すべきでなく、また歴史的にも把握せねば理解できない言葉が、マルクスおよびエンゲルスによって少なからず発見されるのが、事実である。かくてマルクス、エンゲルスは端緒的商品を論理的に展開しながら、別に歴史的にも理解すべしと言つてゐる。故に、端緒的商品は論理的であつて同時に歴史的でもあり、資本制商品であると同時に先資本制商品でなければならぬ。これが向坂教授の至極正当な意思である。

しかし、そのための教授の論証を問題にするかぎりでは、先に述べた推察的批判を余儀なくされてきたのであつた。最初に、わたしは教授にこの思想の賛成して、資本論叙述の歴史的出発の論拠となるマルクス、エンゲルスの言葉を重要視した。しかし、これは、かかる重要な言葉の数々を、機械的に個々別々に当面の問題に適用することに賛意を表したのではない。

或は、たとえ数々のかかる言葉を相互に関連せしめて把むとしても、――教授は恐らくこの程度に進んで居られるであらう――ただ、それだけに止まることに満足することにも、賛意を表するつもりはない。このような論証的思惟を、ヘーゲルもレーゾンヌマン(本来の必然性のない理由づけ、悪く言えばコジツケ)ないし外的反省として斥けていたのであつて、哲學的思惟とは、凡そ縁のないものか、その媒介的手段でしかない。数々の言葉の相互関連は、總體的に把まれねば、その真実の意味は理解できない。この真実の意味が問題を解明する本来の根拠である。マルクス、エンゲルスは、端緒の歴史的出発を主張すべき根拠があればこそ、到る所で色々の言葉で、それを主張したのである。そのかぎりで、この主張のための色々な諸言表のほかに、この主張の論証が、資本論の何処かで展開されていなければならぬ。それは何処においてであるか。すなわち、端緒的商品の歴史的出発点を論証した個所は、いうまでもなく明かに、第三節の価値形態の歴史的反省の立場における発生的叙述である、とわたしは見るのである。

先にも述べたが、資本論の学的体系において本来の端緒としての商品は、冒頭文節における商品である。そして、それは

賃労働者の資本主義的に疎外された实在性であり、剰余労働の対象化である。かかる「要素的定有」を、外から、われわれが眺めるときは直接性に、第一、二節の単純化された商品規定が端緒として現れる。これは、右の本来の端緒にたいして、いわば第一の派生的端緒である。しかし、この端緒は、われわれ外的反省者に直接的であつても、商品自体にとっては媒介的な現象的な現象形態でしかない。ここに、商品自体にとつての端緒として、その直接性——前にならつて、これを強いて言えば第二の派生的端緒として相互に區別を鮮明にしうるであらう——が求められねばならないことになる。すなわち、商品自体が、自己反省としての歴史の遡源によつて、自らの複雑な資本制的諸規定を捨象し、かくて単純化された自己の過去の姿を、自己の本来の直接性、自己自身の本質としての定立することがなければならぬ。譬えば、人間の成熟した細胞が、自らの発生の根拠を反省してアミーバであるとするのである。アミーバから現在の自己の複雑さにまで連続して發展してきた歴史的過程を、人間の細胞自体が自覚するという立場である。これが第三節の叙述を可能ならしめたマルクスの歴史的反省の立場であつた。この歴史的反省によつて、資本制の商品自体が、自己の歴史的端緒を、過去の単純商品として自覚し定立するのが第三節の商品自体の直接性である。この方法的立場は、単に実証主義的な歴史記述ではない。歴史的事實を媒介にした規定的反省の立場であり、経験科学の外的反省を止揚した哲学的理性の機能そのものである。資本論は、単に経験科学として片づけ得ない哲学的契機をもつてゐること、これは周知のはずであるが、しかし、この哲学的契機の哲学的把握のためには、多少の「煩瑣」な思弁を必要とすると思つておかない。

向坂教授が右の論文で、副島種典氏ならびに遊部久蔵氏の非歴史の見解を非難することは、極めて正当であつて、わたしも、この非難を効果あるものにしつゝ思つてゐる。しかし、教授が「マルクスの歴史的方法は、資本論を煩瑣な觀念論的な仕方では理解しようとしなかつたかぎり、問題のないところである」(七頁上段)と語るとき、教授は、経験主義に一步後退することを、告白したことになつていたのでなからうか。遊部氏が当面の問題の解明において觀念論的失策のあつたことは、わたしとしても指摘済みなので、右の向坂教授の口吻を遊部氏に当てはめるとしても、遊部氏としては、端緒の問題をヘーゲルと関連して深く解明せんとするオーソドックスな途を歩んでゐるのである。当面の問題にかぎらず、一般に資本論の学的体系なり方法論なりの問題に関するかぎりには、觀念論的でないところの「煩瑣な觀念」的操作を容んでは、資本論を単純

な経験科学に堕して了うか、このことが不可能なるかぎりでは、苦しい理由づけに満足せねばならないことになる。この俗流化と混乱とを防ぐものが、わたしの一貫して主張する「論理学として資本論を読む」ということの真意なのである。

ところで、宮川教授の向坂教授にたいする批判(『資本論研究』第一分冊)は、賛成できない不当のものであって、同じ歴史主義の意思をもちながら、対立した論述を展開しているものとして、わたしは宮川教授批判を、向坂教授批判とは逆の方向で、試みることに客観的意義を見いだしている。これはスペースの都合で次号に廻した。

ところで諸商品世界の無限な質的雑多性は、ヘーゲルによれば、没尺度的な全体性に裏づけられたかぎりのものとして、雑多な質的諸規定も全体性の諸契機でなければならぬ。この全体性が、自らの諸契機に無関心でなにかぎりで、抽象的没尺度でなくして絶対的無差別性と呼ばれているのであった。すなわち無差別的な全体性は、外面的に単に定立されたはずの質的雑多を自らの諸契機とするかぎりでは、これに媒介されるとされねばならない。したがって、諸商品世界の質的雑多性は、もともと、ヘーゲルの言うごとき「自己自身に關係する外面性であり、自己への關係として同時に止揚された外面性である」¹⁰⁾でなければならぬ。しかもヘーゲル『論理学』にあつては、この外面的な尺度的諸契機の自己自身への關係という自己の基体的全体性への、この反省的自己運動によって、「有論」の段階は「本質論」の段階に移行するものとして叙述されているのであるが、今のばあい、この移行の論理は、諸商品世界の外面的直接性の自己止揚による実体的諸關係への移行、すなわち、疎外的実存世界からの実体的資本への自己回復の論理でもあり、また、したがって諸商品世界の仮象性からその本質的規定性への自覚の論理でもあるはずである。資本の外面的直接性をもつこの対象論的な自己反省の動的論理は、つねに想起されなければならないにしても、しかしながら、本節では、この仮象實在にすぎない諸商品世界としての、この外面的直接性の經驗的實在性が、さしあたり確認されておく必要があるのである。

さて、社会的總資本の外面的直接性は、カントの認識論によるまでもなく、われわれに直観される感性的実在であることに問題はないのであるが、ここにおけるわれわれ人間の感性的直観について、カントの分析によって、若干の解明を予め試みるならば、対象を内容として受け容れる形式——ヘーゲルの抽象的没尺度がカントのこの直観形式である——として、空間と時間とをもっているとされる。したがって、さきに、資本の外面的直接性が一つの混沌たる全体の表象であるとしてきたのは、この一つの直観形式としての空間的契機において受容されたかぎりの直観内容であるにすぎなかったのである。ところが、この直観内容としての質的雑多を、単に混沌にとどめず、雑多を雑多として受容するためには、諸商品の一つ一つを区別しながら辿ってゆくということを意識的にせねばならず、しかも、区別のうちに同一性をかくのごとく直観的に把んでゆくにしても、そこに一つの「視角」¹¹⁾が要るわけである。——このばあいの、或る何らかの「視角」で区別しながら辿ってゆくということは、時間的な経過でなければならぬが、このような総合の働きが直観のうちに具はっているのであって、この事実が、カントをして直観形式の他の契機として、時間を認めしめる根拠になっているのであった。すなわち、われわれの感性的直観は、単に空間的に受動的のではなく、時間的には能動的であって、したがって、感性的直観において、すでに綜合作用を営んでいるのである。とすれば、終極的諸商品世界の質的雑多の、混沌なるままの空間直観でなくして、雑多としての直観内容を受け容れるためには、質的雑多を示す無限の諸商品に共通なる性格を、われわれは何らかの手續で経験的に、現実の商品世界の具体的生活の体験から、学びとっていたとするほかにいであろう。それが一つ一つを区別しながら総合してゆくところの「視角」になるわけであるが、この「視角」としては、「交換される有用物」という単純な規定のほかに、何があるであろうか。かくして、この「視角」

——これはカントにおいて「図式化された概念」であり、ヘーゲルにおいては本質性への反省の諸規定であるが——だけによって、終極的商品世界における直接的諸規定の一つ一つを辿り、そして見まわし、かく見わたされた地平において現れ出てくる商品世界は、如何なる直観内容であろうか。それは、第一巻の第一、二節の商品世界において受容される所与内容そのもの——「商品の二つの要素、使用価値および(交換)価値」、すなわち「価格をもつ有用物」——でないのか。

このように、試みにカントによって分析してきた今も、なお、第一ないし二節で分析の対象になっている普通の商品以外の、例外的な諸商品の実存している事実から、終極的商品世界と端緒的商品世界との二つの対象の存在に、固執しうるであろうか。——感性的直観の対象は、一つでなければならぬ。対象的に唯一つの現実の商品世界があつて、それになりたいするわれわれの感性的直観における所与内容の規定性に、複雑さと単純さとの差異があるのである。

10、ヘーゲル『大論理学』（邦訳）五五三頁。

11、このことについては、第五節「カントの先験的感性論の適用」、とくに第六節「経験的構想力の破綻」において分析的に叙述を進めてあるのであるが、ここに、その要約を先取して当面の問題の解明に援用したのである。